

2024/6/29

# リトルハウス通信

今、リトルハウスでは「就労活動の熱」が高まっているように感じます。その大きな理由の一つが、リトルハウスで行われている「ネットオークションへの出品作業」の活性化が上げられます。

ベテランのネット販売事業者の方から、最新の出品ノウハウを伺うことができたことが大きな要因でした。職員、利用者共に、出品のノウハウについての講習を受け、商品タイトルのつけ方や、写真の取り方、文章の書き方、それらを作業の実践に忠実の取り入れたところ、大きく業績が伸び始めたのです。

そしてこの「就労活動の熱」の源泉は、各自が講習で学び、そこで得たスキルを自らの努力で習熟させ、自らが工夫した結果として、業績が伸びた、ということに他ならないと感じています。即ち「主体的な作業の要素」が強いということだと思のです。

それは「言われたままに行う作業」とは一線を画し、自らの作業における主体性と、それに伴うスキルの向上が、両輪となって実感できる点が大きいのではないのでしょうか。

私個人としても、改めて「就労支援」ということを考えるよい機会になりました。そこで少し古い記事にはなるのですが、2008年に月間福祉で掲載された『鼎談 「働くこと」の意味「就労支援」が必要な人への対応の現状から考える』を改めて読んでみたのです。

この記事には、障害者や生活保護受給者に対しての就労支援の現状と課題がテーマとして語られているのですが、そこで焦点化されていたのは「尊厳のある働き方」というものでした。この「尊厳のある働き方」を支援していく為にはどうしたらよいかという話の流れから、「社会参加とか、自己実現につながる働き方というものを心に留めながら支援を行っていく状況を定着させていきたい」として「働くことの意味を就労支援に関わる者がもう一度見つめ直してそれを共通基盤にしていく」(※1) 必要性があると、就労支援に関わる者に向けて述べられていました。

確かに私のように就労継続支援 B 型事業所で就労支援を行っていると、どれだけ売上を上げて、工賃として支払うことができるか、という点にばかり注力しがちになります。しかし本来は、当事者の「自己実現につながる就労活動」の後押しをすることが第一であることを常に考えなければならないのだと思います。

それは言い換えれば「当事者主体の就労活動支援を行う」ということでしょう。そして就労活動支援においても、ソーシャルワーク実践の考え方をしっかり反映されて然るべきではないかと思つた次第です。

## 引用文献

1. 新保美香、朝日雅也、平田厚著 月間福祉『鼎談 「働くこと」の意味「就労支援」が必要な人への対応の現状から考える』2008 P19